



第32回オリンピック競技大会(2020/東京)が7月23日から8月8日までの17日間にわたり開催され、史上最多の205の国と地域から約11,000名の選手が参加し、33競技339種目で熱戦が繰り広げられた。

日本にとって1964年の東京大会以来2回目の夏季オリンピックの開催となった東京2020大会は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、オリンピック史上初となる開催の一年延期。さらに、ほとんどの会場が無観客となるなど、異例づくめの大会となった。

そんな中、日本選手団は金メダル27個、銀メダル14個、銅メダル17個の計58個という過去最多のメダルを獲得。

本号では東京2020大会に選手として参加したオリンピック・パラリンピアンをはじめ、さまざまな形で大会を支えた方々の声をお届けします。



“支えと団結”で成し遂げた東京2020大会 成果と課題を次世代へ

橋本 聖子 OLY

(東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 会長)



東京2020大会は、新型コロナウイルスという未曾有の困難の中、一年の延期、原則として無観客となるなど異例づくめの大会となりました。この大会が何とか実施できたのは、アスリートをはじめ、ボランティア、医療従事者、競技団体の関係者、放送・報道の関係者、パートナー、公的機関、テレビの視聴者の方々、そして大会スタッフ、全ての関係者のおかげです。本当にありがたく、思い起こせば今でも感謝の気持ちでいっぱいになります。

大会前には開催に否定的な声が強い時期もありましたが、開催を信じ努力を続けてくれたアスリートの皆さんは、これまでの大会と変わらず躍動し、世界中に感動や希望を届けてくれました。本当にありがとうございました。

大会が一年延期となった後、組織委員会の最大のミッションは、安全・安心に大会を実施することでした。結果として、徹底した検査と行動管理による水際対策、コロナ対策は機能したと考えていますし、専門家の方々からも同様の評価をいただいています。大会を直接の起因とするクラスターは海外の関係者についても国内の関係者についても報告されていません。

東京大会の取組は重要な先例となりました。そこで実施されたコロナ対策や「プレイブック」は2022年の北京大会にもしっかりと引き継がれています。

大会はコロナ禍の下での最初の世界的イベントとして、コロナと闘いつつ社会の営みを継続するための一つのモデルを示すことができたと考えています。

また、東京2020大会が社会に変化のきっかけをもたらしたのも数多くあります。共生社会の実現(ユニバーサル・デザインの街づくり、心のバリアフリー)、持続可能な社会の実現、震災復興・地域活性化、スポーツに親しむ健康な社会の実現、女性の社会参画などです。スポーツをきっかけに社会は変わることができます。オリンピックの皆様のお力添えもいただきながら、こうした取組みも発展させていきたいと願っています。

他方、準備や運営に当たってご批判もいただきました。準備段階では、コロナ禍の下で大会を開催する意義が見出せない、感染拡大を招くのではないかとの声がありました。また、運営段階では、無観客の決定が遅かった、食品や医療消耗品の廃棄がなぜ発生してしまったのかなど声がありました。

今大会の振り返りは9月末の組織委員会理事会において速報としてお示ししました。年末に向けては、今大会の知見・経験を「東京モデル」としてとりまとめたいと考えています。その際は、良かった点・改善の余地があった点も整理してお示ししたいと考えています。

私は1964年10月5日、東京オリンピックの開会式の5日前に北

海道で生まれました。「聖子」という名前は、その開会式をどうしても自身の母親に見せたいと、2人で上京した父が、国立競技場を見た聖火に感動して名付けてくれた名前です。選手としてはスピードスケートと自転車競技で合計7度オリンピックに出場させていただきました。大会組織委員会においては草創期から理事を務めさせていただき、オリパラ大臣となった間は組織委員会を離れ国の立場で開催準備に関わり、最後は会長として森喜朗会長の後を継いでその任を果たさせていただきました。

大会直後の世論調査ではオリンピックを開催して良かったと思っている方が約6割、パラリンピックを開催して良かったと考えている方が約7割ということでした。コロナ禍の下での開催にも関わらず多くの方に「良かった」と考えていただいたのは大変ありがたいことです。

引き続きオリンピックとパラリンピックの価値が日本の皆様にご理解いただけるよう、また、東京大会のレガシーがきちんと次世代に引き継がれていくよう、日本オリンピック協会の皆様とともにオリンピック・ムーブメントの推進に取り組んでいきたいと思えます。

加えて、今後、2030年冬季大会に向けて札幌への招致活動も本格化してまいります。東京大会の成果や課題をしっかりと踏まえ、アスリートの輝く舞台を創るために、私も全力を尽くしてまいりますので、オリンピックの皆様、準会員・一般会員の皆様のご支援・ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

最後になりますが、大会へのご理解・ご支援に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。



© PHOTO KISHIMOTO

東京2020オリンピック 日本代表選手団 団長を終えて

福井 烈

(東京オリンピック日本代表選手団 団長)



私はオリンピックではありません。

テニスはオリンピックにおける日本のメダル第1号にもかかわらず、1928年から84年まで中断、88年ソウル大会で正式競技に復帰するまでアマチュアリズムを重要視するオリンピック競技から外れており、私の現役時代と正式競技への復帰時期が合わず、残念ながらオリンピックの夢は叶いませんでした。

現役を退き、監督、指導者としてオリンピックに関わるようになり、他競技の方達との交流が始まりJOCでの仕事もさせて頂くようになりました。

JOCの仕事をする、周りはオリンピックやメダリスト、かつて日本中を熱狂させた名選手達ばかりです。みんな個性的で情熱にあふれ、スポーツにかける思いの大きさに圧倒される事も多々あります。その思いが一つになった時、東京にオリンピックがやってくる事になりました。

自国開催決定以前も、スポーツ界にとってオリンピックは最高峰の大会であり、そこでのメダル獲得は強化、普及にとって何よりの起爆剤となります。そのオリンピックでのメダル獲得が偶然ではなく必然となるべくJOCゴールドプランの構築、スポーツを科学的にも分析する為の最先端基地としてのJISSやNTCの設置等、地道な努力によってオリンピックへの機運が高まり東京オリンピック招致に至りました。

そして自分自身驚きの日本代表選手団団長の役目を担う事となり、個性豊かな選手や指導者、関係者との関わりに思い悩む中、自分の役目は大きなたくさんの歯車を円滑に回す事であり、そうであれば最高純度の潤滑油になるという覚悟を持ちました。

最高純度の潤滑油になる為には何をすれば良いのか？様々な思いを巡らせていた時にコロナ禍に見舞われました。今まで当たり前だった事が当たり前ではなくなり、価値観が崩壊し不要不急という言葉が価値観を支配し始めました。

スポーツは不要不急なのか？オリンピックの開催意義は？

オリンピックが延期となった一年間。スポーツ界は英知を結集してオリンピック開催の為にそれぞれの役目を全うしました。選手も一年ピークを先に持っていくという今まで経験しなかった難しい取り組みを強いられました。指導者、関係者そして国を挙げてコロナと戦いつつ開催への信念で一日一日前に向かって進みました。この一年こそが東京2020の財産であるとも言えるのではないのでしょうか。

待望の開会式。まだまだコロナ禍で賛否両論ある中の開催でしたが、こんな時だからこそスポーツの潜在能力を知らしめる時だと確信していました。スポーツは毅然としたルールに守られた正々堂々の闘いです。闘う姿が人々の心を動かし、国をも動かします。

ルールを守って闘うことの尊さをスポーツで知らしめ、人間の可能性を知らしめることでコロナ禍の状況を打開する何かにかつとなるのではないかと信じていました。

東京2020は日本選手団過去最高のメダル獲得で幕を閉じました。この難しい状況の中、選手、指導者、関係者の皆さんの努力には頭が下がります。

また、この難しい状況の中、関わった全ての方々の情熱、信念で感染者を一人も出さずに大会を終えることができた事を一番の誇りに思います。

私が団長として大切にしていた事は、「和の心」です。「和」は日本を示し、平和、調和、そして「なごむ」という意味を持っています。日本人の誇りを持って、感謝の気持ち、思いやりの気持ちを持って心ひとつに闘って欲しいと思っていました。また団長は究極の裏方であり、最高純度の潤滑油となるべく気を配り、何かあった時の責任は取るという覚悟で臨んでいました。チームジャパンの最後の砦として日本選手団を守る事が最大の役目であると考えていました。

異例づくめの歴史的な東京2020は幕を閉じました。

開催は正しかったのか？オリンピックの意義は？グローバルとは？

東京2020は様々な問題提起をしてくれました。今まで当たり前だった事が当たり前でなくなった事で、うやむやだったり、見えなかった本当に必要な事、あるべき姿が見えてきたように思います。東京2020によってあぶりだされたことが、これからのスポーツ界にとってあるべき姿を見極める指針になることを期待します。

本来スポーツは、選手、見る人、世の中にとって意味のある、価値のある三方良しのものであるべきだと考えます。誰かの一人勝ちのパワーバランスではなく、関わる全ての人々の心を動かす必要不可欠なものであり続ける事が、本当のあるべき姿であると思います。

これからのスポーツ界を背負って立つ若い世代の人たちに東京2020までの道のり、出来事を伝え、これからのスポーツ界をより良い道に導く判断にして頂きたいと思います。



世界から寄せられた感謝の手紙 東京2020オリンピック・パラリンピックから 学んだこと

小谷 実可子 OLY

(東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 スポーツディレクター)



失敗に終わった2016年の招致も含めて、2006年から関わってきた東京オリンピック・パラリンピックが、昨年2021年に開催することができました。国内立候補都市を東京か、福岡かを選考している頃お腹の中にいた娘は、まもなく高校生になります。長い間携わってきた東京オリンピック・パラリンピック開催という夢が、多くの方の熱意、ご協力、ご支援によって現実のものとなりましたが、なんだかすでにあれは幻かと思うほど遠い昔に感じられます。

最初の2016年招致はJOCのアスリート委員長として関わっていましたが、当時、アスリートの方々はオリンピック招致についてあまり興味や関心が高くなかったような気がします。機運醸成のためにお手伝いをお願いしても、断られることが多々ありました。結果として2009年コペンハーゲンIOC総会ではリオデジャネイロに敗れ、敗因の1つとして国内での支持率の低さも挙げられました。しかしその後、東日本大震災の後被災地に足を運び、スポーツを通して子供たちが笑顔になれる事を知ったアスリートたちは、ロンドンオリンピックで大活躍をしました。その後、50万人を超える人たちに見守られた銀座でのパレードを経験し、スポーツは人々を元気にできる、社会を変えられるという手ごたえを感じたといいます。2020年招致に向けて、本当に多くのアスリートの皆さんが様々な形で参画してくださいました。

私は招致アンバサダーとして国内での機運醸成、国際会議でのロビーイング、東京の会場案内映像のナビゲーターとして関わらせていただき、2013年ブエノスアイレスIOC総会での東京決定の瞬間も現地でも経験させて頂きました。アルゼンチン入りしてから様々な逆風が吹いたものの、政界、財界、スポーツ界全ての方々が肩書をかなぐり捨て、必死に汗をかいて東京招致という1つの目標に向かっていく姿を見ながら、ゾクゾクしたのを覚えています。



これで決まらなかつたら日本には二度とオリンピックは来ないのではないかと思うほどの一体感でした。今は亡き、ジャックロゲ会長が「TOKYO!」と言った瞬間を、橋本聖子さんのすぐそばで迎えられたことも、後から思えば何かのご縁だったのかもしれない。その後、オリンピックパラリンピックの一年延期が決定した後、2020年10月に組織委員会のスポーツディレクターに就任し、その約4ヶ月後には橋本聖子新会長をお迎えすることになりました。競技施設や競技スケジュールが延期前に全て整っていたからこそ、一年延期しても開催が可能になった日本に対し、私はスポーツディレクターとして向き合っていた国際競技連盟の方々から、たくさんの感謝と協力を惜しまないという力強いメッセージを受け取りました。コロナ禍での競技運営に関しては、IFごとで試行錯誤して進めていた感染対策を施した上での競技大会運営経験が役に立ちました。東京2020大会ではコロナ対策リエゾンオフィサー(CLO)を設置し、何度もオンラインで事前のブリーフィングをしていたおかげで、本大会で初めて対面したIF会長や事務総長の皆様から「君がずっと画面で見ていた新しいスポーツディレクターミカコだね。すぐわかったよ」と言っていただきました。

期間中はサッカー練習会場のトイレ掃除や、備品集めのためのホームセンター買い出しに始まり、IFホテルの食環境改善のために各ホテルを回ったり、国立競技場の芝のメンテナンスサポートのためスタジアム内に泊まり込んだり(あまりに寒くてトイレで寝たこともありました)選手村開門確認のため朝4時からメインエントランスに陣取ったり、輸送オペレーション改善のためドライバーさんの話所に駆け込んだり……。

多くの競技会場や練習会場を回りましたが、ほとんど競技を見ることができなかったのも、後になって「あーこの選手がこんな風に活躍したんだな」とか「こんな感動が生まれていたんだな」と少しずつテレビなどで知り、なんだか自分が経験した東京2020大会とははパラレルワールドのように感じています。

大会中は次々に発生する課題、プレッシャーに押しつぶされそうになり、夢の舞台だと思っていたオリンピックが嫌いになりそうな時もありました。でも、各会場で精力的に頑張ってくれたボランティアの皆さん、スポーツマネージャーさんや会場担当の皆さんの気迫あふれる仕事ぶりに毎回パワーをいただき、そして各所で出会うIFの方から「アスリートたちは素晴らしい体験をしている。オリンピックを開催してくれて本当にありがとう。」「アスリートの人生最高の舞台を作ってくれてありがとう。」「このような状況での開催は日本にしかできなかった。」「いろいろな不安の中、日本だったから来れた。日本以外だったら怖くて参加でき

なかった」「行動制限や毎日の検査、無観客など、たくさんのマイナス要素があるにもかかわらず東京2020大会は何もネガティブに感じないどころか素晴らしい大会だ。これは日本の関係者が柔軟性とスピード感を持って、おもてなしの心でサポートしてくれているからに他ならない」など、たくさんの胸に響くお言葉をいただき、毎回涙涙でした。特に競技運営に関しては、「細かい問題はあるものの会場チームの頑張りのおかげでうまく競技ができています。君はスポーツディレクターとして素晴らしいチームに恵まれているね!」とすべての会場で言っていただいた事は本当に誇らしく、オリンピックに夢を持って、スポーツの力を信じて組織委員会に集まってきた人たちが、社会の批判にさらされながら迷い、苦しみ、悩みながら前例のないコロナ対策業務に追われていた姿を思うと、大会中の皆さんの頑張りやお褒めの言葉が本当に嬉しかったです。そして皆、本当にカッコよかった…！今大会で生まれたハードのレガシーだけでなく、人的レガシーが、間違いなくこれからの日本スポーツ界を発展させていくのだと確信をしました。ボランティアの皆様も、コロナ禍で人数が減ったり、研修の機会がなくなったり、また無観客になって仕事を失った方もいたり…本当に大変な状況の中、自発的に工夫して大会や選手を盛り上げてくださいました。多くの方々が今後もスポーツ大会でボランティアをしたいとその後のアンケートに答えてくださっていると聞いています。このボランティアの方々もこれからの日本のスポーツ界を支えてくださることでしょ。

私が日本でのオリンピック開催に興味を持ち意欲を持ち、お手伝いをしたいと思ったのは、以前青森であったアジア冬季競技大会での感動がきっかけです。選手村となったホテルの食事会場にアジアオリンピック評議会アスリート委員長として視察に行った時、ホテルのシェフはどの国の選手が何時ごろ食事に来て、何を好んで食べているかを瞬時に把握し、満足していただけるように時間や内容を工夫してサービスして下さっていました。後に有名になった『お、も、て、な、し』ですが、すでに私の中では日本人の素晴らしい文化として心にあり、このような国で世界のアスリートを迎えてオリンピックが開催できたらどんなにすばらしいだろうと考えた時のことを思い出しました。

閉会後も多くのIFから感謝のレターをいただきました。

「日本が成した遂げたことの価値は年月が経過したときにももっともっと大きくなるだろう。」「日本人は世界のスポーツ界の感謝を受け止め、日本が成し遂げたことへの誇りを持ってほしい。」

東京2020大会が残したもの、それは、競技会場と言うハードの



レガシー、関わった人々の人的レガシーと共に、私にとって非常に大きなものが「スポーツは社会を変えられる」という実感でした。今大会のビジョンの1つに「多様性と調和」というものがありました。女子アスリートの参加率がオリンピックでは48%、開会式の旗手も男女が務め、選手宣誓も男女のジェンダーだけでなくジェネレーションや、関わる競技のバランスも配慮されました。オリンピックに出場したLGBTQのアスリートは180名を超え、50を超えるメダルを獲得しました。史上初めてトランスジェンダーを公表する選手が参加した大会ともなりました。私は組織委員会で、ジェンダー平等と多様性を推進するチームのリーダーと言う立場で、組織内のアンケートや東京2020大会の取り組みを発信することを通し、初めてこれらの課題に関して深く考えることになりました。そして、今後の継続した取り組みの必要性を感じました。オリンピック憲章にも、オリンピズムの目的として、人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てること。とあります。

オリンピックは、もちろんアスリートたちによる最高峰の競技を行う場所ではありますが、その姿や感動を通して社会を変えられる、社会の成長や発展に寄与できる素晴らしい機会であることを改めて学ばせていただきました。今回、特別で貴重な2020大会を傍で、肌で感じる事ができた1人として、今後も社会発展のために尽くしていくことが、スポーツディレクターを務めさせていただいた私の責任であると考えています。そしてコロナ禍でも東京2020大会を開催したことの意義、理解、協力して下さった方々への恩返しになるのではないかと考えています。社会を明るくポジティブに健康的に推進していく為に、1人でも多くのアスリートやオリンピックの皆様と共にこれから活動して行けたらいいなと思っています。



第32回オリンピック競技大会(2020/東京)

●陸上競技

山縣亮太 OLY (日本代表選手団主将)



© PHOTO KISHIMOTO

1964年以来、実に57年ぶりに開催された東京大会に私は特別な想いで臨みました。私自身このような状況下での開催に直前まで悩みましたが、今こそオリンピズムの基本原則「スポーツを通じた平和でよりよい世界の実現」に立ち返り、「スポーツの力」で新たな時代への歩を進めたいと強く感じるに至りました。最後になりますが、大会を通じて支えてくださったボランティア・医療従事者の皆さま、応援して下さった全ての方々に日本選手団を代表して心より御礼申し上げます。

●レスリング

須崎優衣 OLY (日本代表選手団旗手)



© PHOTO KISHIMOTO

東京2020大会では開会式で旗手を務めさせて頂き、本当に素晴らしい経験をさせて頂けた事に心から感謝しております。日本選手団の先頭に立ち、国旗を持って国立競技場を歩いたあの景色は一生忘れません。また試合では小さい頃からの夢であったオリンピックでの金メダルを獲得することができました。夢を叶えることができたのは周りの方々に沢山支えてもらったおかげです。これからも応援して下さる方々への感謝の気持ちを胸に恩返しできるように、また新たな夢を叶えることができるように頑張ります。

●フェンシング

見延和靖 OLY



© PHOTO KISHIMOTO

今大会は、私自身リオデジャネイロ大会に続き2度目の挑戦となりました。悲願であった金メダル獲得は新たな時代の幕開けとなる歴史的快挙だと感じています。応援して下さい下さった皆様、本当にありがとうございました。大舞台を経験するたびに、スポーツは社会の人たちの努力の上に成り立つものだと感じます。だからこそ我々アスリートは社会に対し感謝の気持ちを忘れてはならないと言うことを今大会では改めて実感しました。

●陸上競技

寺田明日香 OLY



陸上引退→出産→ラグビーに転向(復帰)→陸上に再転向という経歴で、10年越しでオリンピックの仲間入りをさせて頂きました。先輩方、どうぞよろしくお願いたします。東京オリンピックでは目標としていた決勝進出はなりませんでした。日本人として21年ぶりの準決勝進出を果たすことができました。残念ながら無観客での開催でしたが、小学校1年生の娘が競技場のすぐそばで応援してくれ、力になりました。娘はちょうど閉会式の日に7歳になりました。私の走る姿を通して、目標を持ってがんばることの大切さを知ってくれるといいなと思っています。

●卓球

石川佳純 OLY (日本代表選手団副主将)



© PHOTO KISHIMOTO

今回の東京オリンピックでは日本選手代表団の副主将の大役を担わせていただきました。他競技の選手と積極的な交流はできませんでしたが、それでも壮行会や、開会式の選手宣誓、閉会式を通じて少なからず交流が持てたことはいい経験となりました。卓球女子団体ではキャプテンとして試合に臨ませていただき、決勝での中国戦で敗れてしまったので、悔しい気持ちでいっぱいだったのですが、やり切った気持ちも同時にあったので悔いはありませんでした。個人的にはオリンピックで、3大会連続でメダルを獲得できたことは、よかったですと思います。



© PHOTO KISHIMOTO

●卓球

水谷隼 OLY



© PHOTO KISHIMOTO

オリンピックが東京で開催されると決まってから、この大会を集大成と思い懸命に努力をしてきました。混合ダブルスでは悲願の金メダルを、そして男子団体では銅メダルを獲得し、最高の形で大会を締め括ることができました。応援して下さい下さった皆様には、感謝しかありません。今回のメダル獲得で、今後の卓球界へ希望を見出せたと思っています。自分の冒険はここまでですが、頼もしい後輩達のもと、これから益々明るくなっていく卓球界が楽しみです。

●飛込

寺内健 OLY



私にとって東京大会は6度目の挑戦となりました。コロナ禍での五輪延期や対応は過去5大会を思い返しても異例続きではありませんでしたが、選手としては開催された事に感謝の想いしかありませんでした。選手村から各国の選手やスタッフに向け毎日温かく送り出すボランティアやスタッフ、関係者の皆様の姿に毎日目頭が熱くなる想いでした。結果としてはメダルには届かずでしたが、この新たなスポーツの価値を感じた経験を未来ある日本の子供達に伝える事を使命とし引き続き日本のスポーツに貢献したいと思っています。応援ありがとうございました。

東京2020 パラリンピック競技大会

●パラリンピアン(競泳)

河合純一(日本代表選手団団長)



昨夏、コロナ禍で開催された東京2020パラリンピック競技大会(2021年8月24日～9月5日)では日本代表選手団への心温まるご声援の数々に心よりお礼申し上げます。

私は2016年のオリンピック・パラリンピック招致活動を通じて多くのオリンピックとご一緒する機会をいただきました。また、学生時代には水泳部でも多くのオリンピックの諸先輩と泳ぐ機会をいただきました。しかしこれまでは個人的な関係でしかありませんでした。2020年の招致活動からは組織的なつながりが広がり、2013年9月の開催決定以後は、「パラリンピックの成功なくして東京2020の成功なし」という掛け声の下、「オリパラ一体」が推進されていきました。

その象徴的な出来事の1つが公式ユニフォームの完全統一ではないでしょうか。さらにナショナルトレーニングセンター・イースト(2019年9月)が完成し医学の活用、選手の育成・強化においても連携が深まってきました。

このような中、新型コロナウイルスの影響で1年延期という誰もが経験したことのない困難に直面したわけですが、JOC 山下会長、日本選手団の福井団長からも常に声をかけていただきながら、この困難な中、感染症対策を徹底しながら無事に大会を終えることができました。

選手村の居住棟はオリンピック時に日本代表が使用した棟を使用したことで、多くのオリンピックたちからのメッセージが掲示されていましたし、我々の結団式にあててオリンピックからのビデオメッセージも届けてくださいました。また、福井団長からもオリンピック閉会式後に激励のお電話をいただきました。この場をお借りして、改めてお礼申し上げます。

それらの追い風を受けて、金メダル13個、銀メダル15個、銅メダル23個という合計51個という好成績を納めることができました。オリンピックの日本代表の勢いをいただき、無観客ながらも多くの国民の皆様からのご声援をいただき、東京オリパラの大成功というゴールに飛び込むことができたのではないかと思います。

このようにこの8年は間違いなくオリパラ一体が促進されたといえます。いま、我々は史上初めて2度の夏季オリンピック・パラリンピックを成功させた国として、海外から注目されています。4年に1度のオリパラで最高のパフォーマンスを発揮するためのトレーニング、コンディショニングにおいて、オリパラの違いはありません。最高の舞台でのオリンピック・パラリンピアンたちのパフォーマンスの輝きも同じであると考えています。こういった価値を理解し合える仲間として、共に未来を描いていけると確信しています。

まだ、パラリンピックの競技団体等の関連団体では財政面、人材面等の組織基盤が脆弱な部分もあるため、JOC、OAJ、オリンピックの皆様にお世話になることもあろうかと思いますが、これまでの蓄積を基礎として、さらにオリパラの関係性を発展させていきたいと思っています。中でも、一般社団法人日本パラリンピアンズ協会(PAJ)とOAJとも連携を深め、スポーツ界に貢献できる具体的な活動が創出できていければと思います。オリパラ一体だからこそ、協力を押し出していけるメッセージがあるはずで。

ポスト2020、ここからが新たなスタートです。スポーツの価値を十分に分かりあえる仲間として、未永く活動をご一緒できますことを楽しみにしています。これからもよろしくお願いたします。この度は貴重な機会をいただきまして、誠にありがとうございました。

●パラリンピアン(テニス)

国枝慎吾(日本代表選手団主将)



コロナ禍での強烈な逆風の中での開催となりましたが、運営の方々やボランティアスタッフの方々のご尽力によって大会が無事に終わったことを心より感謝申し上げます。多くの方々からスポーツの力を感じることが出来た大会になり、この大会に選手として、日本選手団主将として、関わったことを心から誇りに思います。



すべて© PHOTO KISHIMOTO

東京2020大会に関わったオリンピックたち

●オリンピック(競泳/バルセロナ大会)

井本直歩子 OLY



© IOC

2020年3月、コロナ禍でギリシャに來られなくなった日本代表団の代役で、聖火を引き継ぎました。前日に電話があり、その夜に友達に赤いジャケットを借りに行きました。まさかの展開に、当日は不思議な感覚でしたが、無事に聖火が日本に渡り、安堵しました。

その一年後、オリパラ組織委員会のジェンダー平等推進チームのアドバイザーに就任しました。ひょんなことからオリパラに関わることになり、たくさんの貴重な経験、学びを得ることができました。

●オリンピック(競泳/北京・ロンドン大会)

伊藤華英 OLY



私はオリンピックとして、組織委の職員として、東京大会に関わりました。アスリート周りの業務を多く担当していました。私自身、この大会で期待も多かったですが、これからのスポーツについて考えさせられる時間でした。この大会で行ったこと、残したもの、残さなければならぬもの。しっかり次世代へ継承して行かなければならないと感じました。スポーツの役割を伝えていきたいです。

●オリンピック(体操競技/東京大会)

早田卓次 OLY



東京2020大会が決定したのは7年前で小躍りして喜んだ。1964年オリンピック・パラリンピックの再現を夢見ていた私は、あの開会式の興奮と感動は忘れることは出来ない。大会会場のオリンピックと観衆との一体感は時間が過ぎた今も蘇る。東京2020大会は無観客ではあったが日本代表選手の大活躍と新種目のスポーツの楽しさ、爽やかさは以前のオリンピックに負けないくらい力を与えてくれた。これこそ“オリンピックの人間力”と確信を持った。オリンピックの祭典は自信とやる気、勇気を起こさせる魔物と思っている。これからもオリンピックの社会貢献を期待しています。



© PHOTO KISHIMOTO

●オリンピック(フェンシング/ロサンゼルス大会)

東伸行 OLY



私は、パラリンピックの車いすフェンシングの国際審判員として参加しました。また、光栄にもパラリンピック開会式に全ての審判員代表として宣誓をさせていただき、ロサンゼルスオリンピック(1984)にフェンシングの選手として参加したことを思い出し感慨無量でした。今大会は様々な課題を乗り越え行われた大会で、多様性と調和、スポーツを通じて誰もが生き生きと活躍できる共生社会を実現するなどのビジョンを掲げた重要な大会でした。今大会のレガシーの継承・啓発に微力ながら尽力していきたいと思ひます。大会が成功裏に終了したことに、組織委員会、大会役員、ボランティア等の関係者の皆様へ感謝申し上げます。

●オリンピック(新体操/ロンドン大会)

サイド横田仁奈 OLY



引退して6年、再びあの舞台上上がったことは今でも夢のようです。昨年開催された東京2020オリンピックパラリンピックでは閉会式の演者として出演しました。2012年ロンドンオリンピックでは新体操団体日本代表として出場、引退後はスポーツブランドに就職し担当アスリートのサポートで平昌オリンピックへ行くことはありましたが、まさか東京オリンピックで再び演技する機会をいただけるなんて…オリンピックパラリンピックとのご縁を感じています。閉会式では出場選手やコーチ、関係者や世界各国の方々に感謝の気持ちを伝えられるように演じることができ、私自身も一生の思い出がまた一つ増えました。今までの経験を活かし、今後もスポーツの価値を伝え続けていきたいと思ひます。

つなげています
スポーツへの想い

スポーツKJ

スポーツKJの収益は、日本のスポーツを育てるために使われています。

スポーツKJ

TEAM JAPAN

日本オリンピック委員会 (JOC) は北京冬季オリンピックの100日前となる2021年10月27日に、新たに「TEAM JAPAN」ブランドを発表しました。「TEAM JAPAN」ブランドは、同年8月に公表した、JOCとしてスポーツの本質的な価値を広く発信し、より良い社会づくりに貢献していくという、JOCが長期的に追い求める“ありたい姿”を示す「JOC Vision 2064」に基づき、これまで以上に競技団体をはじめとする多くのステークホルダーとともに、スポーツの本質的な価値を広く発信するために構築されました。

「TEAM JAPAN」は国際総合競技大会の日本代表選手団だけではなく、各競技それぞれの日本代表選手、世代別の日本代表選手も含まれ、オリンピック以外の時も継続して「TEAM JAPAN」を応援していただくことで、年間を通じてより多くの方にトップアスリートを身近に感じてもらうことができると考えています。

ブランドの象徴となるエンブレムは、「TEAM JAPAN」の頭文字であるTとJをかたどり、レッドとゴールドの2色のフレームで構成されています。日の丸にも使われているレッドはアスリートやサポーターらの情熱を、ゴールドには「TEAM JAPAN」が人々を輝かせ、未来を照らす“光”となっていきたいと願う想いが込められています。

同日には、JOCとJPCが共催で、オリパラ同一デザインとなる北京冬季オリンピックの公式スポーツウェア、公式服装の発表を行いました。



TEAM JAPAN
ウェブサイト



© 日本オリンピック委員会

北京2022オリンピック・パラリンピック冬季競技大会



© PHOTO KISHIMOTO

北京2022オリンピック (第24回オリンピック冬季競技大会) が2022年2月4日～2月20日の16日間 (7競技102種目)、北京2022パラリンピック冬季競技大会が2022年3月4日～3月13日の10日間 (6競技78種目)、「Together for a Shared Future (未来に向かって一緒に)」を大会公式モットーに掲げ、北京中心部・延慶・張家口の3つの競技ゾーンで開催。

次号 vol.39では、北京2022冬季大会を特集予定です。

<https://olympics.com/ja/beijing-2022/>



OLY House Tokyo 2020

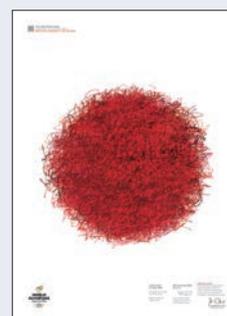
本来であれば、都内にハウスが設置され、オリンピックのためのイベントやサービスが提供される予定だったOLY House Tokyo 2020。

各国のオリンピックが東京に集まることができなかった東京2020大会では初めてオンライン上に開設され、さまざまな企画が実施されました。

Leave your Mark

東京で集うことができない代わりに、大会への感謝を伝えるためのムーブメントとして、世界中のオリンピックが自身のいる場所を添えたサインをオンライン上に残しました。世界各国1,857名のオリンピックが参加し、集まったサインをもとにポスターを完成させました。集まったサインはコチラでご確認いただけます。

<https://leaveyourmark.thewoa.org/en/tokyo-2020>



Olympians for Life

Olympians For Lifeは、社会に多大な貢献をしたオリンピックに贈られる賞で、オリンピック開催期間中に各大陸から1名ずつ、計5名のオリンピックが表彰されます。

東京2020大会での受賞者の詳細についてはWOAウェブサイトでご確認ください。

<https://olympians.org/oly-house/olympians-for-life/>



Tokyo 1964 Live chat

1964年の東京大会に出場したオリンピック6名のライブトークをオンラインで開催。1964年大会の思い出や、オリンピックの変化についてなどを話題に盛り上がりました。

WOAのYouTubeでアーカイブがご覧いただけます。

<https://youtu.be/sPo-oozDIWU>



Athlete365

Athlete365は、オリンピックやパラリンピアン、トップアスリートのための公式コミュニティです。様々なコンテンツを展開しており、各大会の期間中には参加選手向けのサービスはもちろん、すべてのオリンピックに向けた有益な情報やサービスが提供されます。

※ OLYとは別の登録申請が必要です。Athlete365にも是非ご登録ください。

<https://olympics.com/athlete365/membership/>



Register for OLY



OLYとは？

「OLY」はスポーツの博士号に相当する、オリンピックだけが使用できる称号です。Ph.D.(博士号)やM.D(医学博士)のように、名前の後に付けることで、皆様がオリンピックであること、オリンピック出場に向けて不屈の努力をされたこと、現在もオリンピックムーブメントの体現者として社会へ貢献をされていることなどを、周りの方々に伝えることができます。2021年現在、1万6千名を超える世界中のオリンピックが使用しています。

※対象はIOCに出場記録がある方のみのため、公開競技のみの出場やモスクワ大会の選手団の皆様、役員・スタッフ等で参加された方は対象外となっております。

OLYの申請方法



① <https://olympians.org/olympians/oly/>へアクセス(QRコードからも可能)。

※サイト内の言語欄から日本語を選択すると日本語ページに切り替わります。

② 必要事項を入力して申請してください。申請が完了しましたら、確認のメールが送付されます。

※チェックボックスの3つ目にチェックいただくことで、IOCやWOAなどからの情報が受け取れるようになります。(オリンピックにとって有益な情報が発信されております。)

③ IOCでオリンピックであることが確認されましたら、登録メールアドレスにOLY証明書(PDF)が送付されます(1週間程)。

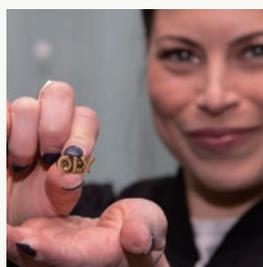
※OLYを申請すると、お名前@olympian.orgというメールアドレスが付与されます。必要に応じてご利用ください。



OLYピン

OAJの会員でOLY証明書を取得された方に限定のOLYピンをお送りしております。

発行には申請が必要になりますのでOAJのウェブサイトにある「OLYピン申請」のリンクバナーからご確認ください。



OLYの使用例

ご自身のSNS(Facebook、Twitter、Instagramなど)、履歴書、名刺、メールの署名など名前を書く場面であればどこでも使用できます。

フルネームの後に半角スペースをあけて、すべて大文字でOLYと記載ください。(文字のサイズは名前と同じでも、小さくしても構いません。カンマやドットは不要です。)

※OLY証明書の取得前にOLYを使用することはできません。また、商業的な広告やプロモーショングッズ等にOLYを単独で使用することはできません。使用上のルール等ご不明な点はOAJ事務局にお問合せください。



The Olympians' Reunion 2021 ～オリンピック同窓会～

WOA Grants事業として、東京2020大会期間中の7月24日(土)と7月31日(土)にOAJ初となるオンラインイベント「The Olympians' Reunion 2021 ～オリンピック同窓会～」を開催。各回アーカイブをOAJウェブサイト、YouTubeに公開しておりますので、ぜひご視聴ください。ご参加いただいた皆様ありがとうございました!!

The Olympians' Online Reunion
～オリンピック同窓会～

7/24 [土] → 1964東京大会 あの時代と今
2021.
MC: 劉臣 富士雄
ゲストパネリスト: 櫻井 孝次 OLY, 竹宇治 聡子 OLY, 千葉 勝美 OLY, 早田 卓次 OLY

7/31 [土] → スポーツにおける多様性と調和
2021.
MC: 小西 美穂
ゲストパネリスト: 小笠原 歩 OLY, 大日方 邦子, サイド横田 仁奈 OLY, 柴田 亜衣 OLY, 杉山 文野, 千葉 吟子 OLY, 森田 淳信 OLY



第1部
「1964東京大会
あの時代と今」



(<https://www.oaj.jp/news/210820/part1/>)



第2部
「スポーツにおける
多様性と調和」



(<https://www.oaj.jp/news/210820/part2/>)

OAJ information

役員改選

令和3年3月22日に開催した令和2年度第4回理事会において、令和3・4年度役員が選任され、就任いたしました。また、これまであった顧問の役職名を名誉委員と名称変更することといたしましたこと、併せてご報告申し上げます。役員ならびに名誉会長・名誉委員の一覧はこちらからご確認いただけます。 <https://www.oaj.jp/about/officials/>



日本オリンピックズ協会 SNS・ウェブサイトのご紹介

OAJ公式LINEを新たにスタートしました!

さまざまな情報を発信してまいりますので、ぜひご登録ください!!



@日本オリンピックズ協会



以下の公式ウェブサイトやSNSでも各種情報を発信しておりますので、こちらもフォロー・いいねをお願いします!!
また、オリンピックの皆さんに告知したいイベントなどがございましたらOAJ事務局までお問い合わせください!!

▶  **OAJ公式ウェブサイト**
<https://www.oaj.jp/>



▶  **Instagram**
@日本オリンピックズ協会
https://www.instagram.com/olympians_japan/



▶  **Facebook**
@oaj.jp
<https://www.facebook.com/oaj.jp/>



▶  **YouTube**
@日本オリンピックズ協会

